# 平安朝漢詩文における「合浦還珠」の比喩表現

## The Metaphorical Expression of 'Hepu Huanzhu' in Han Poems of the Heian dynasty

梁青

The idiom 'Hepu Huanzhu' comes from 'The Book of the Later Han Dynasty·Mengchang Biography'. It says that Hepu used to be rich in pearls. Due to the excessive harvesting of Hepu prefects, pearls gradually migrated into the border area. After Meng Chang took office, he got rid of the drawbacks of the past and cultivated the pearl industry, and the pearl returned to Hepu. The story spread to Japan and was well-known to the nobility and gentry in the Heian Dynasty. 'Hepu Huanzhu' in the Han poems of the Heian dynasty was often compared to scenery such as the moon, chrysanthemum, and snow, but there is no corresponding description of the scenery in the 'Mengchang Biography'. This article takes these metaphors as the object of investigation, trying to clarify the great influence of Tang Dynasty poetry on it.

【キーワード】平安時代、漢詩文、合浦還珠、比喩、変容

【Keywords】Hepu returning pearls, Heian era, Chinese poetry, metaphor, transformation

### ０．はじめに

平安朝文学に受容された漢故事は多いが、よく知られたものの一つに「合浦還珠」が挙げられる。この故事は『後漢書』巻七十六·循吏列伝第六十六「孟嘘伝」の「孟嘘字伯周、会稽上虞人也…遷二合浦太守一。郡不レ産二穀実一、而海出二珠宝一、与二交阯一比レ境、常通二商販一、貿二糴糧食一。先時宰守並多二貪穢一、詭レ人采求、不レ知二紀極一、珠遂漸徙二於交阯郡界一。於レ是行旅不レ至、人物無レ資、貧者餓二死於道一。嘘到レ官、革二易前敝一、求二民病利一。曾未レ逾レ歳、去珠複還、百姓皆反二其業一、商貨流通、称為二神明一」によるものである。後漢では、合浦の太守が飽くことなく真珠を採ったので、その地の真珠は交阯郡の境に移ってしまったが、孟嘘が赴任して善政をしくや、珠はふたたび合浦にもどってきたという。

「合浦還珠」という故事は『後漢書』を通して日本に伝わり、平安朝文学のなかに取り込まれた[1]。平安漢詩文においては、「合浦還珠」がよく月、菊、雪、蛍などを表現するときに用いられるという傾向が看取できる。例えば、「天山不レ弁何年雪、合浦応レ迷旧日珠」（『和漢朗詠集』255・月・禁庭翫レ月・三統理平）は「合浦珠」を「月」に喩えて詠んでいる。その原拠としての出典を『後漢書・孟嘘伝』に求めることは誤りとは言えないが、『孟嘘伝』は「月」については言及してはいない。つまり、この比喩表現は『孟嘘伝』の本文に直接拠るのではあるまい。そこで、この類の表現はいったいいかなるものに依拠しているのか、「合浦還珠」を含む中国詩との関連はどうであろうかということについて、検討する必要がある。しかし、諸注釈や先行論文は平安朝漢詩文における「合浦還珠」を解釈する際、ほとんど『後漢書・孟嘘伝』を引用するが、平安朝漢詩文と中国詩との関わりについて触れることは皆無に等しい[2]。



---

[1]『後漢書』の伝来については、池田昌弘「『後漢書』の伝来と『日本書紀』」（『日本漢文学研究』3、2008年）を参照されたい。

[2]「合浦還珠」をめぐっては以下の論考がある。杤尾武「和漢朗詠集私注引用漢籍考」（『成城国文学論集』14、1982年）、滝沢精一郎「合浦珠・昆吾剣――和漢朗詠集と禅文学」（『野州国文学』30・31、1983年）、桜井陽子「『和漢朗詠集』依拠の表現――合浦の玉を

そこで、本稿は平安朝漢詩文における「合浦還珠」の比喩表現について検討し、それと中国詩（唐代まで）との影響関係を明らかにしたい。なお、小論は比喩表現について考察するものとし、良吏・善政を表す「合浦還珠」については別稿に譲りたい。この点をあらかじめ断っておく。

## 1. 中国詩にみる「合浦還珠」

平安朝漢詩文に詠まれた「合浦還珠」[3]を明らかにするために、まず、中国詩における「合浦還珠」をいま一度概観してみよう。「合浦」は今の中国広西チワン族自治区北海市一帯に位置する[4]。晋・葛洪の『抱朴子・祛惑』に「凡探二明珠一、不レ於二合浦之淵一、不レ得二驪竜之夜光一也」とあるように、合浦は古来真珠の名産地として知られている。

唐以前では、「合浦還珠」を含む用例は極めて稀で、「合浦珠」のほうが多用される[5]。唐代に入って以降、「合浦還珠」の用例が急速に増えてきて、表現も豊かになっている。『全唐詩』『全唐文』を見ると、実に60例以上の「合浦漢珠」が確認されるが、良政・善政を表す「合浦還珠」は全体の半分以上を占める。「明珠帰二合浦一、応レ逐二使臣星一」（初唐・王維・送二邢桂州一）、「無レ貪二合浦珠一、念守二江陵橘一」（初唐・楊衡・送二王秀才往二安南一）、「化佇還珠美、心将片玉貞」（中唐・銭起・送二張中丞赴二桂州一）などはその例である。これらの送別詩には、地方へ赴任していく人を送り出す際、かの孟嘗にも似た治政の功をあげるようにという願いが込められている。また、「甘雨随レ車、雲低二軽重之蓋一。還珠合浦、波含二遠近之星一」（初唐・王勃・上二兗州刺史一啓）、「豈直二広州清節一、酌二貪泉一於石門一。合浦神君、返二明珠一於漲海一」（盛唐・楊炯・唐恒州刺史建昌公王公神道碑）とあるように、地方官の功績を褒め称える詩文も枚挙にいとまがない。

初唐では、「合浦還珠」は「珠」に関する有名な故事として認識されている。李嶠は「珠」（『李嶠百二十詠』）という詠物詩で「昆池明月満、合浦夜光回」と詠じている。また、唐代の類書『芸文類聚』の「珠」（巻八十四・宝玉部下）の項に、「謝承『後漢書』曰、孟嘗為二合浦太守一、郡境旧采レ珠、以易二米食一、先時二千石貪穢、使民采レ珠、積以自入、珠忽徙去、合浦无レ珠、餓死者盈レ路、孟嘗行化、一年之間、去珠複還」とみえる。中唐期になると、「珠」を主題とした詩歌の数は俄然急増して、士大夫間に広範な流行をよぶに至る。『文苑英華』巻百八十六の「省試七」には「不レ是二霊蛇吐一、非レ縁二合浦還一」（中唐・独孤綬・投レ珠二於泉一）、「合浦当レ還日、恩威信已敷」（中唐・莫宣卿・賦得二水懐レ珠一）、「守レ恩辞二合浦一、擅レ美掩二連城一」（中唐・羅泰・暗投二明珠一）などの省試詩が収めら



---

みがく」（『延慶本平家物語考証』2、1993 年）、「能における漢詩文の受容――〈合浦〉の説話的背景とその作風」（和漢比較文学叢書6『中世文学と漢文学2』汲古書院、1987 年）。

[3]本論は「合浦還珠」「合浦還珠」「合浦珠還」「還珠」「合浦珠」などの表現を一括して「合浦還珠」と考えている。

[4]「合浦」の所在については説が分かれている。『故事俗信ことわざ大辞典　第二版』（小学館、2012 年、「合浦」の項）は「「合浦」は、中国の地名。漢代に郡が置かれた。今の広西チワン族自治区合浦県一帯」とある。一方、『日本国語大辞典 第二版』（小学館、2010―2012 年、「合浦」の項）は「今の広東省合浦県一帯」とある。また、『日本古典文学大系 72』（岩波書店、1966 年、368 頁）は「合浦は、広東省廉州府の海岸で珠を産する」とする。紀元前 111 年、前漢が南越国を滅ぼすと、合浦郡（現在の広西チワン族自治区合浦県）が置かれた。後漢の孟嘗がそこで清廉な政治を行ったのである。漢から唐にかけては、幾度かの郡の再編や改称を経たのち、天宝元年（724）、広東廉州は合浦郡と改称された。『日本国語大辞典』『日本古典文学大系』はそれを根拠にして注解を施したものであろう。

[5]用例の調査にあたって、以下の資料を参考した。雕龍古籍全文検索シリーズ 1『全唐文』、雕龍古籍全文検索シリーズ 3『先秦漢魏晋南北朝詩/文選』、北京大学全唐詩検索系統（http://chinese.pku.edu.cn/tang/）。

れている。唐詩のみならず、唐賦においても多くの「合浦還珠」が見出される。『全唐文』には、「泉非二合浦一、尚謂レ出二其明珠一。地比二荊山一、固可レ営二其拱璧一」（盛唐・王季友・商丘開泳得二明珠一賦）、「漢武帝受レ報二於昆明之岸一、孟嘗君反レ輝二於合浦之波一」（盛唐・張随・海客探二驪珠一賦）、「性失則遺、若二合浦之徙去一。心虚潜至、同二夜光之暗投一」（中唐・白居易・求二玄珠一賦）、「去映二魏車之乗一、来還二合浦之中一」（晩唐・王奉珪・明珠賦）などが見える。文人たちはこれらの詠珠賦において、「媚川珠」「隋侯珠」「合浦還珠」「明珠按剣」「探驪得珠」「完璧帰趙」「魏珠照乗」などの典拠を駆使して「珠」を表現している。

ところが、唐代までの漢詩文を調査した結果、「珠」に関する比喩表現は数えきれなく多いが、「合浦珠」が比喩表現に用いられる用例は意外に少ない。唐以前では、「采レ珠非二合浦一、贈レ佩異二江濱一」（『初学記』巻二十五・器物部上・隋・江総・三善殿夜望二山灯一詩）の一首のみであり、「合浦珠」は山寺の輝かしい法灯に喩えられる。唐代では、「合浦珠」の比喩表現はただの10例に留まっている。初唐・楊炯「浮漚賦」の「俯而観レ之、錯落煌煜、若三明珠之出二合浦一。遠而望レ之、的礫旁羅、若三衆星之列二長河一」、中唐・陸贄「月臨二鏡湖一賦」の「類二泗濱之磬見一、疑二合浦之珠明一」、中唐・李子卿「水蛍賦」の「色動二波間一、状三珠還二於合浦一。影懸二潭下一、若三星聚二於潁川一」、中唐・蔣防「蛍光照レ字賦」の「臨二墨池一則珠還二合浦一、映二草聖一則燎點二寒叢一」、中唐・韓愈「明水賦」の「形象未レ分、徒騁二離婁之目一。光華暗至、如下還二合浦一之珠上」、中唐・劉禹錫「奉レ和二中書崔舎人八月十五日夜玩レ月一二十韻」の「水是還珠浦、山成二種玉田一」、晩唐・李潾「華月照二方池一賦」の「素魄将臨、合浦之珠乍吐。清漣同映、玉壺之氷始藏」、晩唐・張祜「投二宛陵裴尚一書」の「月上二連城璧一、星環二合浦珠一」、晩唐・李商隠「四年冬…又作二残雪詩一各一百言以寄二情於游旧一」の「珠還犹照レ魏[6]、璧碎尚留レ秦」がある。「合浦還珠」は「浮漚（水に浮かぶ泡）」「灯」「月」「蛍」「星」「雪」など光り輝くものに喩えられている。その他、中唐・元稹は「善歌如二貫珠一賦」で「悠揚緑水、訝二合浦之同帰一。繚繞青霄、環二五星一之一気」と、『礼記・楽記』の「故歌者、累累乎端如二貫珠一」を踏まえて、歌声を視覚的に捉えて「合浦珠」に喩えている。



## 2. 平安初期に詠まれた「珠還合浦」

一方、こうした中国詩の影響下にある平安朝漢詩文の世界に目を転じると、「合浦還珠」の用例の総数は17である。その中で、良吏・善政に関する詩は8例あるが、相手の治績を褒め称える詩文はほとんど見えない。良吏・善政のほうが圧倒的に多い唐詩の流れと異なって、平安朝漢詩文には比喩表現が10例あり、全体の半数以上に及んでいる[7]。

日本漢詩文における「珠還合浦」の最古の用例は『経国集』（巻二十・247）にある。慶雲四年（708）に作られた百済倭麻呂への対策題は、「伏閣之臣精勤徹夜。還珠之宰清儉日新。瞻彼二途、兼之非易。如不得已、何者為先（伏閣（ふくかふ）

[6]「珠還犹照魏」は「合浦還珠」と「魏珠照乗」（『史記』（巻四十六・田敬仲完世家）の「斉威王与魏王会田于郊。魏王問曰、王亦有宝乎。威王曰、有。梁王曰、若寡人国小也、尚有径寸之珠照前后各十二乗者十枚、奈何以万乗之国而无宝乎」）を融合させたものと推測する。

[7]良吏・善政を表す「合浦還珠」については8例と比較的少ない。「太守施廉潔、還珠自效珍」（『田氏家集』200・省試賦得合浦還珠）、「村落不知詩變玉、漫言濃土有還珠」（『田氏家集』118・奉呈野秀才詩伯）、「莫厭泣別無量涙、応作明珠合浦還」（『田氏家集』51・送常陸中別駕之任）、「再為合浦守、去珠耀又圓」（『江吏部集』述懐古調詩一百韻）、「割鶏惟愧蔡雲剣、折蚌只慙合浦珠」（『江吏部集』冬日於州廟賦詩）、「自慙再作沈潛吏、遙隔孟嘗合浦情」（『江吏部集』夏夜同賦燈光水底珠応教）、「孟伯周之揚声明也、合浦還珠之月」（『本朝文粋』巻三・対策・大江挙周・詳循吏）、「会稽終織錦衣色、合浦再瑩珠玉光」（『新撰朗詠集』354・刺史）とある。なお、『和漢朗詠集』（692・刺史）には唐・僧亘玄の「精明合浦珠相似、断割崑吾剣不如」が収められている。

の臣は精勤にして夜を徹し、還珠の宰は清倹にして日に新たなり。彼の二途を瞻(み)るに、之を兼ぬること易(やす)きにあらず。もし已(や)むことを得ざれば、何をか先と為む）」[8]とある。「伏閣之臣の精勤」と「還珠之宰の清倹」の二通りの官吏のありかたがあるが、どちらを優先するか、という質問である。「還珠之宰」は孟嘗のことである。『魏書・良吏伝』の「其於移風革俗之美、浮虎還珠之政、九州百郡、無レ所レ聞焉」にも「還珠之政」がみえる。かかる対策題の出現は八世紀以来の良吏を重視する律令国家の方針を反映しており、「珠還合浦」の故事が律令官人の間に深く浸透していたことを物語るものと考えられる。

「合浦珠」がはじめて日本漢詩に詠まれたのは、作者の判明するものでは桑原腹赤「和二滋内史秋月歌一」（『文華秀麗集』巻下・雑詠・138）の「葉映洞庭波里水、珠盈合浦蜂心胎（葉は映(は)ゆ洞庭波里の水、珠は盈(み)つ合浦蜂心(ばうしん)の胎(はら)）」[9]が最も早い。洞庭湖には秋の月が輝いて、木の葉は水に美しく映じ、珠は合浦の蚌の腹の中に満ちるという意である[10]。「珠盈…蜂心胎」は月が満ちるとともに真珠が蛤の中で成長するという説によるもので、比喩表現ではない。漢・揚雄「羽獵賦」（『文選』巻八・賦丁）の「方椎二夜光之流離一、剖二明月之珠胎一」に付された李善注によれば「明月珠、蚌子珠、為二蚌所一レ懐、故曰レ胎」という。また、晋・左思の「呉都賦」（『文選』巻五・京都下）に「窮性極形、盈虚自然。蚌蛤珠胎、与レ月虧全」と見え、呂向注は「蛟蛤珠胎皆盈虧之物。月満則珠全、月虧則珠缺」と記す。

しかし、「珠盈合浦蜂心胎」は「合浦還珠」でなく「合浦珠」を言うものである。島田忠臣（828－892）の「省試賦得珠還合浦」は日本における「合浦還珠」という語彙の現存初出の詩として知られる。島田忠臣は平安朝で最も多く「合浦還珠」を用いた詩人である。斉衡元年（854）、二十七歳の忠臣が文章生試を受けた際の詩題は「珠還合浦」（『田氏家集』200）である[11]。詩は、次のように詠じる。

省試賦得珠還合浦

太守施廉潔、太守　廉潔を施す
還珠自效珍。還珠　自(おの)づから珍(ちん)を效(いた)す
光非懐漢女、光は　漢女の懐(いだ)くにあらず
色似泣鮫人。色は　鮫人の泣くに似たり
舊浦還星質、旧浦に　星質還(かへ)る
空涯返月輪。空涯に　月輪返る
行藏猶若契、行藏　猶し契るが若(ごと)し
隠見更如神。隠見　更(また)神の如(ごと)し
感化来無脛、感化　来るに脛(けい)無(な)し
嫌貪去不親。貪を嫌(きら)ひて　去(さ)りて親しまず
希哉良史跡、希(まれ)なるかな　良史の跡(あと)
誰踏伯周塵。誰か踏まむ　伯周の塵[12]



[8]本文と訓読は、津田博幸『経国集対策注釈』（塙書房、2019 年、245 頁）による。

[9]本文と訓読は、『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粋』（日本古典文学大系 69、岩波書店、1986 年、308 頁）による。

[10]「洞庭湖・月・木葉」の組み合わせは南朝宋・謝荘「月賦」の『文選』「洞庭始波、木葉微脱」にみられる。

[11]蔵中スミ「島田忠臣年譜覚え書」『田氏家集注（上）』和泉書院、1991 年、284 頁。

[12]本文と訓読は、小島憲之監修『田氏家集注（下）』（和泉書院、1994 年、356 頁）による。

当詩は合浦の太守となった孟嘘が廉潔な政治を行い、真珠がふたたび出現したことを述べている。島田忠臣は大学寮の就学を通じて、「珠還合浦」や儒教的徳治主義に基づく良吏的観念を十分に身につけていた。この作品の第二、三聯には、「合浦還珠」の比喩表現の生成過程を考える上で興味深い要素が見受けられる。「光非懐漢女、色似泣鮫人」は美しい光を放つ合浦珠は漢女の珠と違い、その美しい色は鮫人の珠のようだという。つまり、「合浦珠」の色や光が平安朝においてはじめて描かれるようになったのである。それは唐代の省試詩に新たに学んだ結果だと思われる。

平安朝の文章生試は唐代の進士科の先例をことのほか重視し、唐代の省試詩から大きな影響を受けていることはすでに指摘されている[13]。例えば、菅原道真には文章生試を備えていた時期に作られた「賦得咏青」という習作がある。この題目は盛唐・荊冬倩の省試詩「奉試咏青」を参考にしたものとされている[14]。荊冬倩の「奉試咏青」が唐代の人が編んだ唐詩集『国秀集』（744）に収録された。『国秀集』は八世紀に日本に伝わり、勅撰三集にその受容がみとめられる。こうして考えてみると、忠臣の「省試賦得珠還合浦」の表現の生成を考えるにあたっては、唐代省試詩としての影響力も無視し難いであろう。李宇玲は忠臣の「省試賦得珠還合浦」という詩題が「唐の先例（『文苑英華』巻一八六・省試七、鄧陟・珠還合浦）から借用したもの」と指摘した[15]。詩題の引用だけにこだわらず、もっと広く両作品の関連を考える必要があろう。鄧陟は「珠還合浦」において、「素輝明蕩漾、圓彩色玢瑞。（中略）影揺二波裏月一、光動二水中山一」と、「合浦珠」の色や輝きを詠んでいる[16]。「色…光…」は忠臣詩の「光非懐漢女、色似泣鮫人」に共通している。ちなみに、忠臣は及第直後に「□□身上生二光影一、合浦明珠透出レ懐」（『田氏家集』201・及第作）と詠み、合浦珠の明るく輝く様を表現している。「合浦珠の輝き」は九世紀中期に現れた平安朝漢詩文の新しい趣向と言えよう。

前に触れたが、中唐では「珠」を主題とした省試詩が流行っていた。唐徳宗貞元七年（791）辛未科の進士科考試では、詩一首（「青云干呂詩」）と賦一篇（「珠還合浦賦」）が課せられた。『登科記考』巻十二において、「貞元七年、進行士三十人、尹枢、状元。知貢挙、礼部侍郎杜黄裳」と記す。『文苑英華』（巻百十七）には尹枢、陸複礼、令狐楚の「珠還合浦賦」が載せられている。それと忠臣詩とを比較すれば、「省試賦得珠還合浦」が貞元七年の「珠還合浦賦」の影響を受けた箇所を看取できる[17]。まず、忠臣詩の第三聯「旧浦還星質、空涯返月輪」を見よう。一句は〈合浦珠が星のように光り輝き、月が再び空に昇ってきたように昔の浦に戻ってきた〉、という内容となる。ここでいう「星」も「月」も、合浦珠の光り輝く様を言うものである。尹枢の「珠還合浦賦」に「輝如二電転一、粲若二星馳一」とあり、合浦珠の輝きを「星」に喩える。また、令狐楚の「珠還合浦賦」にも「爾其状也、上掩二星彩一、遙迷二月規一」とみえる。

次の例も、忠臣詩が貞元七年の「珠還合浦賦」から深い影響を受けていることを証明するものである。忠臣詩の第



[13]李宇玲「道真と省試詩――近代詩から古体詩の創出へ」『源氏物語と漢詩の世界』青簡舎、2009年、173頁。

[14]小島憲之『上代日本文学と中国文学（下）』（塙書房、1965年、1597頁）、芳賀紀雄「少壮の日の島田忠臣――少外記任官まで」（『ことばとことのは』第五集、1988年、57頁）を参照されたい。

[15]李宇玲は注13の論文で（173頁）両者の詩題の類似を指摘したが、内容面の受容については触れていない。

[16]鄧陟の生没年は不明であるが、張忠綱は『全唐詩大辞典』（語文出版社、2000年、17頁）で鄧陟について「徳宗時（筆者注：742―805年）在世、進士及第」とする。

[17]三人の賦はかなりの長文で、必要な箇所だけを引用する。

二聯における「漢女…鮫人」の対は尹枢「珠還合浦賦」の「非レ経二漢女之懐一、寧泣二鮫人之涙一」を想起させる。漢・張衡の「南都賦」（『文選』）には「耕父揚二光於清冷之渊一、游女弄二珠於漢皐之曲一」とあり、「游女（漢女）弄珠」の原拠の内容は李善注に引かれた「韓詩内伝」の「鄭交甫遵二彼漢皐台下一、遇二二女一、与言曰、願請二子之佩一。二女与二交甫一、交甫受而懐レ之、超然而去、十歩循探レ之、即亡矣」（鄭交甫は漢水のほとりで二人の神女に出会い、美しい珠をもらい受けたという伝説）にみられる。その対となった「鮫人」が拠ったのは、晋・干宝（『搜神記』巻十二）の「南海之外、有二鮫人一、水居如レ魚、不レ廃二織績一、其眼泣、則能出レ珠」（南海の水中に住み、流す涙が珠になるという「鮫人」の説話）である。そして、忠臣詩の第四聯における「行藏」「隠見」は合浦珠が姿を消したり再び現れたりするさまをいう。陸複礼「珠還合浦賦」には「珠行藏兮、与レ道為レ鄰」、令狐楚「珠還合浦賦」には「隠見諒レ符二乎龍躍一、虧全非レ系二乎蚌老一」と語例が見える。第五聯の「無脛」は足を持たないはずの合浦珠が戻ってきたことを表す。尹枢「珠還合浦賦」には「驪龍之珠、無レ脛而至」、令狐楚「珠還合浦賦」には「不レ召二其珠一、珠無レ脛而至」とみえる。最後に、忠臣は「感化来無脛、嫌貪去不親。希哉良史跡、誰踏伯周塵」と述べて、詩全体を締めくくった。陸複礼「珠還合浦賦」の「其来也所以輔レ正、其去也所以戒レ貪」にも「来…去…」がみられ、自然災異の消長と官吏の徳行とを結びつける点においても、忠臣詩に通じるところがある。

島田忠臣の省試詩には、「合浦珠」を「星」「月」に喩えたり、その「光」と「色」を表現したりして、中唐省試詩への模倣の痕跡が明瞭に残されている。忠臣以後、「合浦還珠」に関する比喩表現が大幅に増えた。その意味では、「省試賦得珠還合浦」は「合浦還珠」の比喩表現の生成を考える上で重要な用例といえよう。

### 3. 詠物詩における「珠還合浦」の比喩表現



島田忠臣が中唐省試詩に学んだ比喩表現が、以後の王朝漢詩文に継承されていく。以下、「合浦還珠」の比喩表現の具体例を見てみよう。

#### 3.1 詠月詩

前掲した「和滋内史秋月歌」の「珠盈合浦蜂心胎」が示すように、「合浦珠」は古来「月」と強く結び付くものである。島田忠臣の「省試賦得珠還合浦」に「空涯返月輪」があることは先に述べた。十世紀以降、「合浦珠」と「月」との関係が更に密接となり、「月」を表すために用いられる「合浦珠」の使用例が複数確認される。

天山不弁何年雪、天山には弁（わきま）べず何（いづ）れの年の雪ぞ
合浦応迷旧日珠。合浦には迷（まよ）ふべし旧日の珠（たま）[18]

（『和漢朗詠集』255・三統理平・月・禁庭翫レ月）

この詩は月の光が照らしている情景を描写している。天山にいつ雪が降ったのかと錯覚し、合浦珠が戻ってきたように見えるという。『江談抄』（巻四）は「天山不レ弁何年雪、合浦応レ迷旧日珠。古老伝云、講レ詩之間、読師早置二他詩一。延喜聖主仰而不レ令レ読、再三誦二此句一。作者不レ堪レ感、叩レ膝高感曰、アハレ聖主哉、聖主哉、時人笑（嘆）レ之」とあることから、当詩が延喜帝時代（897－930）に作られたことがわかる。中国では、詠月詩に「合浦珠」が用いられる先行例としては、中唐・陸贄の「月臨二鏡湖一賦」に「類二泗濱之磬見一、疑二合浦之珠明一」、唐・李漣の「華月照方池賦」に「素魄将臨、合浦之珠乍吐。清漣同映、玉壺之氷始藏」、中唐・劉禹錫「奉和二中書崔舎人八月

[18]本文と訓読は、『和漢朗詠集』（新編日本古典文学全集 19、小学館、1999 年、141 頁）による。

十五日夜玩レ月二十韻一」の「水是還珠浦、山成二種玉田一」がみえる[19]。

そして、「合浦応迷旧日珠」と同質の表現が、藤原明衡（989－1066）「六波羅蜜寺対レ月」（『本朝無題詩』巻三・月前）の中にも確認できる。

珠還合浦晴應琢、珠は合浦に還り　晴れたるに応に琢（みが）くなるべし
冰結滹沱曉欲消。冰は滹沱（こた）に結び　曉に消えなんとす[20]

〈合浦珠にみがきをかけたかと思うほどに、或いは滹沱河に氷を敷いたかと見紛うほどに、月の光がさえ渡って地上を白く照らしている〉という詩句には、「合浦珠→月の光」の連想が見られる。「冰結滹沱」は光武帝が滹沱河を渡ろうしたとき、河水は凍結していて渡河できたという故事を下敷きにしたものである[21]。「月」はこの故事に関係しないが、「月」を「氷」に比喩することから「冰結滹沱」という表現がとられたのである。さらに、藤原明衡は「月光依レ水明」（『泥之草再新』）において、「鏡驚二百練一臨レ江所、珠没二再還一照レ浦程」と詠んでいる。「鏡驚百練」は晉・王嘉『拾遺記』の「百煉可為レ金、色青、照二鬼魅一猶如二石鏡一、魑魅不レ能二藏レ形一矣」を原拠としているが、ここの「百練鏡」は川の水を照らしている「月」の喩えである[22]。「合浦珠」「月」「百煉鏡」が同じ光り輝くものであるからこそ、区別が付けにくいのであろう。

### 3.2　詠蛍詩

天徳三年（959 年）八月十六日、史上初の「闘詩」が催された。橘直幹（生没年不詳）が賦した句題詩「蛍飛二白露間一」に、次のように言う。

蒹葭渚誤珠還浦、蒹葭の渚は誤つ　珠の浦に還るかと
竹葦村驚燭映虚。竹葦の村は驚く　燭の虚（そら）に映ずるかと

〈蛍の光は、合浦珠が再び戻ってきたかと誤たれるほどに明るい。また、その光が灯火に見えて驚かれることだ〉という表現においては、「合浦珠」は蛍の明るさを表現するのに用いられている。「蒹葭」と「蛍」とが共に詠まれた例としては、平安人によって名句として高評される「蒹葭水暗蛍知レ夜、楊柳風高雁送レ秋」（『和漢朗詠集』蛍・187・許渾・常州留二与楊給事一）が挙げられる。「蛍―合浦珠」の比喩表現は南朝梁・蕭綱「咏レ蛍詩」（『初学記』巻三十・虫部・蛍第十四）の「屏疑二神火照一、簾似二夜珠明一」の延長線上に置くべきであろうが、唐代には中唐・李子卿「水蛍賦」の「色動二波間一、状二珠還一於合浦一。影懸二潭下一、若二星聚一於潁川一」、中唐・蔣防「蛍光照レ字賦」の「臨二墨池一則珠還二合浦一、映二草聖一則燎點二寒叢一」などの先例がみえる。「蛍」と「合浦珠」の両者がまじわっていて区別がつかないという表現は、ほぼ唐詩の影響下にあると考えてよかろう。

また、これと類似する例は、惟宗孝言（1015－?）「翫レ蛍」（『本朝無題詩』巻二・動物）の「閑庭灯挙無レ消レ雨、合浦珠還似レ感レ秋」がある。一句は〈蛍は灯火ではないので、雨風に消えない。その光は合浦珠のように明る



[19]「合浦応迷旧日珠」において、「月」と「合浦珠」は「白」という色彩の類似によって結び付けられる。しかし、陸贄、李漣、劉禹錫の詩は水に映る月の影が合浦珠のように見えていると詠んだ。両者の間には、実に隔たりがあると思われる。

[20]本文と訓読は、本間洋一『本朝無題詩全注釈』（新典社、1992 年、345 頁）を参照した。

[21]『後漢書・王霸伝』の「及至滹沱河、候吏還白河水流澌、無船、不可済。（中略）比至河、河冰亦合、乃令霸護度、未畢数騎而冰解」による。

[22]その類例として、中唐・盧仝「月蝕詩」の「百煉鏡、照見膽」が挙げられる。なお、中唐・白居易には「百練鏡」という詩がある。

い。眺めていると秋だなと感じる〉という意である。なお、これに類した表現に「松台暁到背レ灯思、荻浦露瑩還レ玉心」（『和漢兼作集』483・高倉院・蛍飛二林寺叢一）がある。〈蛍の光が露のように輝いて珠が合浦に戻ってきたように思われる〉といった表現は、前掲した惟宗孝言詩と同じ趣を感じさせる。

### 3.3　詠雪詩

次に掲げるのは、「雪」を表現するために「合浦還珠」が用いられる例である。釈蓮禅（1084年以後の生まれ）は、次のように詠んでいる。

孫氏寒窓如燭映、孫氏が寒き窓に　燭の映（は）ゆるが如く

孟嘗昔浦似珠還。孟嘗が昔の浦に　珠の還るに似たらん[23]

（『本朝無題詩』巻二・天象・賦レ雪）

〈雪は、窓辺で勉学に勤しむ孫康の書を照らして灯火のように明るく、或いは、もとの浦に再び還って来た珠であるかと思われるほどである〉[24]という詩句においては、釈蓮禅は雪の白さを合浦珠と表現したのである。中国詩には、「粲兮若二馮夷一、剖レ蚌列二明珠一」（南朝宋・謝惠連・雪賦）とあるように、雪を真珠に喩える例が見える。また、晩唐・李商隠は「珠還犹照レ魏、璧碎尚留レ秦」（四年冬…又作二残雪詩各一百言一以寄二情於游旧一）において、「合浦珠」を「雪」に見立てている。「孟嘗昔浦似珠還」はこのような表現の伝統の上にあったのであろう。

上から分かるように、十世紀以後の「合浦還珠」の比喩表現は月、蛍、雪を表すために用いられている。これらの例はこの故事本来の儒教的な主題からはかけ離れてしまったが、いずれもすでに中国においてその使用法が認められるもので、王朝人の独創ではない。



## 4.　「合浦還珠」の変容

一方、平安朝漢詩文における「合浦還珠」の比喩表現は中国詩に拠りながらも、新たな展開を遂げていく。「合浦還珠」の変容の背景には、どんな力がそこに動いたのかについて考えてみよう。

### 4.1　言葉の連想

島田忠臣は常陸国へ赴任していく友人を送る際に、「莫厭泣別無量涙、応作明珠合浦還（厭（いと）ふことなかれ泣きて別るる無量の涙、応（まさ）に明珠と作（な）りて合浦に還（かへ）るべし）」（『田氏家集』51・送二常陸中別駕之レ任一）[25]と詠んでいる。前述したが、唐代では、「合浦還珠」を用いることによって友人の任国での善政を予祝する送別詩が盛んに詠まれている。忠臣詩における「合浦還珠」の用いられ方が唐代の送別詩に由来することは明らかである。だが、ここでの「明珠」は比喩として友人との別離を悲しんで流す「涙」と関連すると同時に、「合浦還珠」の故事を引き出している[26]。「針頭不レ解二愁眉結一、線縷難レ穿二涙臉珠一」（中唐・白居易・繍婦嘆）から明らかなように、「涙一珠」という比喩表現は唐詩に多く用いられている。忠臣詩においては、本来お互いに関係することなく独立して

---

[23]本文と訓読は、前掲の『本朝無題詩全注釈』（67 頁）による。

[24]「孫氏寒窗」とは孫康は家が貧しくて灯火の油が買えないため、書物を雪に照らして学問に努めたという故事である。『芸文類聚』の「孫康家貧、常映雪読書」を原拠としている。

[25]本文と訓読は、小島憲之監修『田氏家集注（上）』（和泉書院、1991 年、218 頁）を参照した。

[26]『田氏家集注（上）』和泉書院、1991 年、220 頁。『田氏家集全釈』汲古書院、1993 年、93 頁。

使われていた「涙―珠」の比喩表現と「合浦還珠」とが結びつけられ、「莫厭泣別無量涙、応作明珠合浦還」という新たな表現が切り拓かれる。

また、『田氏家集』(118・奉呈野秀才詩伯)の「村落不知詩変玉、漫言濃土有還珠(村落は知らず　詩の玉に変はることを、漫言す　濃土に還珠ありと)」[27]も、言葉の連想によって成り立ったものである。忠臣は元慶七年(883)春、美濃介に任ぜられて現地に下向した。この詩は任地で作られたもので、〈村の人は詩が玉に変わるものだとは知らず、私の良政によって珠が美濃国にももたらされたと〉という意である。「朝罷二香煙一攜二満袖一、詩成二珠玉一在二揮毫一」(盛唐・杜甫・和二賈至早朝一)とあるように、「詩―珠(玉)」の比喩表現は多用されているが、「合浦還珠」の故事とは本来互いに相関していない。忠臣は「詩―珠(玉)」の比喩表現と「合浦還珠」とを結びつけることで、斬新な表現を創出することができたのである。

この二首の忠臣詩には、語句レベルの摂取だけでなく、唐詩の表現技法を意図的に取り込もうとする傾向も認められる。同様の手法は、前掲した中唐・元稹「善レ歌如二貫珠一賦」の「悠揚緑水、訝二合浦之同帰一」にも見られる。前に述べたように、「合浦還珠」の故事はここで歌声を表現するために用いられる。「珠」の比喩表現と「合浦還珠」とを合わせる点で、忠臣詩の表現方法に通底する。

### 4.2　白色への好尚

寛平四年(892)、九月九日に重陽宴があって、群臣が詩を賦した。菅原道真(845―903)は「惜二殘菊一、各分二一字一、応レ制、並レ序」(『菅家文草』356)において、重陽を過ぎた菊を賞美し、次のように詠んでいる。

奪情只有披沙練、情を奪へば　ただ沙に披く　練　あらくのみ
平價其如合浦珠。價を平るに合浦の珠に其如
此是殘花何恰似、此れは是れ殘んの花し　何にか恰も似たる
行年六八早霜鬚。行年六八　早霜の鬚[28]

「此是殘花何恰似、行年六八早霜鬚」は「菊」を「早霜鬚(白鬚)」に喩える。つまり、ここの「残花」は黄菊ではなく白菊のことをいう[29]。「奪情只有披沙練、平價其如合浦珠」については、川口久雄は「白菊をみると、墨子が白い練糸をみて心を奪われたことが思い出される。…残菊のかがやきは合浦に還ってきた珠のようだ」[30]と注する。ここにみられる「合浦珠―菊」の比喩表現は前に述べた平安朝の比喩表現とは異なり、中国詩に先蹤が見出しがたいものである。



[27]本文と訓読は、小島憲之監修『田氏家集注(中)』(和泉書院、1992年、205頁)による。

[28]本文と訓読は、『菅家文草注釈　文章編』(勉誠出版、2019年、191頁)を参照した。

[29]道真詩の詩序における「偸色不異受金」は菊の黄色い色が金を盗み取ったかと思われる意を表す。黄菊である可能性が示唆される。一見詩の内容と矛盾するかに見えるが、道真詩は中唐・白居易「重陽席上賦白菊」の「滿園花菊鬱金黄、中有孤叢色似霜。還似今朝歌酒席、白頭翁入少年場」を踏まえて、黄菊の中の稀少の白菊を対象としていると思われる。

[30]『日本古典文学大系72』岩波書店、1966年、386頁。やや難解な一句ではあるが、『大系』は「披沙練」を『墨子・所染』「子墨子言見染糸者而嘆曰、染于蒼則蒼、染于黄則黄」によるものと解する。また、『菅家文草注釈　文章編』(勉誠出版、2019年、191頁)は「平價其如合浦珠」を「價を平るに合浦の珠に其如」と読む。これに従っても、「合浦珠」が白菊の喩えと解釈することもできると考える。

道真が白菊を賛美するために「練糸」「合浦珠」を引合いに出したのは、単なる偶然であろうか。鈴木宏子は「雪・月・花・雲・波はお互いにイメージを重ならせつつ、閉じた糸を作っているのである。この結びつきの基調になるのは、ほのかに白く明るい視覚的印象であろう。…このような表現が重んじられる背後には、白きものへの憧憬ともいうべき独特の美意識が働いている」[31]と指摘する。「練糸」と「合浦珠」が白いものである点において共通している。つまり、道真は「白きものへの憧憬ともいうべき独特の美意識」に基づいて、「練糸・合浦珠・白菊・早霜鬚」に「白」という共通点を見出し、独自の比喩表現を創り出した、と推察することができるであろう[32]。時代は下るが、藤原敦基（1046?－1106）は「賦二殘菊一」（『本朝無題詩』054）において、「合浦昔珠宜比レ白、穀城古石幾争レ黄」と詠じている。菊の花がまるで合浦珠にその白さを比べられるほどだといった表現は、道真詩とは同じ発想によるものである。「合浦珠」「白菊」を結び付けているところに、平安人の美意識が現れているのである。

ところが、「合浦珠」の白い輝きを詠んだ例は、唐詩にはないわけではない。前掲した鄧陟「珠還合浦」の「素輝明蕩漾」、陸複礼「珠還合浦賦」の「色仍皎皎」、苑防「暗投明珠」の「精霊辞二合浦一、素彩耀二神州一」における「素輝」「皎皎」「素彩」は白い輝きを意味する。しかしながら、令狐楚「珠還合浦賦」の「俄鎧彩以璘玢」、尹枢「珠還合浦賦」の「抱二圓質一而胥既、揚二衆彩一而未レ久」、鄧陟「珠還合浦」の「圓彩色玢瑞」といった例があるように、「合浦珠」は多彩な色と輝きを持つもので、一概に白いものとは言えないところもある。また、きれいな丸の形をしているのがその特徴である。しかし、平安人は「合浦珠」の持つ多彩な色彩感と丸い形を無視し、その白い輝きだけに注目しているのである。この取捨選択の背後には、やはり独自の美意識等が働いているだろう。

なお、浦島説話を改作した漢文伝である『続浦島子伝』（920－932）においても、「合浦還珠」の比喩表現が見られる。「島子忽然頂二天山之雪一、乗二合浦之霜一矣」は故郷に帰った浦島子が玉手箱を開けると、たちまち白髪の老人になってしまった情景を述べる。「天山之雪」「合浦之霜」は浦島子の白髪の喩えである。中国文学では「合浦之秋」「合浦之珍」「合浦之波」「合浦珠」「合浦葉」などの表現があるが、「合浦之霜」は見出されない。「天山之雪・合浦之霜」の組み合わせは三統理平の「天山不弁何年雪、合浦応迷旧日珠」を踏まえて作られたものである[33]。渡辺秀夫は「「雪」と「月」と「花」と、これら日本詩歌の基幹的題材とされる《雪月花》は、その詩的表象（比喩・見立て）の内包と外延において、白の色彩映像で統一・収束され、三者は同値・互換の環のなかにつながれるというわけである」と指摘する[34]。つまり、「（白髪）霜・合浦珠」は白い視覚的印象を共有しているので、「互換性」のある言葉として認識されたのである。したがって、『続浦島子伝』の作者は自国の美意識に照らして「合浦珠」を「合浦霜」の形に変えて、中国詩には見られない新たな表現を作り上げている。



## 5. おわりに

以上、平安朝漢詩文における「合浦還珠」の受容を見てきた結果、次のようなことが明らかとなった。

---

[31]鈴木宏子「〈雪と花の見立て〉考」『古今和歌集表現論』笠間書院、2000 年。

[32]高兵兵は『菅家文草』の 1 番と 269 番の詩について、道真が白梅と白菊とをともに星に喩えているのは、白梅と白菊には白いイメージを持つ同士の関連があるからだと指摘した（「菅原道真の比喩表現と和歌――日中詩歌比較の視角から」『和漢比較文学』(32)、2004 年、17 頁）。

[33]渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』第三篇第八章「群書類従本『浦嶋子伝』の検討」勉誠社、1991 年、524-525 頁。

[34]渡辺秀夫『詩歌の森　日本語のイメージ』大修館、1995 年、320 頁。

1. 中国詩では、良政・善政を表す「合浦還珠」は全体の半分以上を占めるが、「合浦珠」の比喩表現はごくわずかであった。一方、平安朝漢詩文では、比喩表現が過半数を占めるが、送別詩は一首のみである。また、相手の治績を褒め称える「合浦還珠」の用例がほとんどない。これは、中国と日本における著しい受容の違いと言うべきである。

2. 勅撰三集における「合浦還珠」詩は六朝文学の影響下にあるもので、合浦珠そのものの特徴に関心をもっていない。それに対しては、島田忠臣は中唐の「珠還合浦」「珠還合浦賦」に学んで、合浦珠の色や輝きを詠んだり、合浦珠を「星」「月」に喩えたりしている。それまでの「合浦還珠」詩を新しい方向へと前進させたという点で、忠臣詩が大きな役割を果たした。

3. 平安中後期、「合浦珠ー月」「合浦珠ー蛍」「合浦珠ー雪」などといった多様な比喩表現が生み出された。「合浦還珠」は良吏・善政の要素を切り捨て、景物を表す表現として享受されるに至った。これらの比喩表現はほとんど唐代に先例が見られるものである。このことは、平安時代の漢詩が唐代の詩歌にならって作られたことの証左の一つと言える。

4. 一方、平安朝の漢詩人たちは、中国詩の模倣にとどまらず、新たな展開を目指そうとしていた。島田忠臣は言葉の連想を働かせて、「珠」の比喩表現と「合浦還珠」とを結びつけることで、独自の表現世界を切り拓いている。また、道真らの詩文では、「合浦珠」を「白菊・霜（白髪）」に喩えて、中国詩にはない表現が作り出される。「合浦珠」「白菊」「霜（白髪）」を同一視にするところに、白色に対する好尚が働いている。

梁青（りょう せい、Qing LIANG　厦門大学（Amoy University））



**引用文献**

『全唐詩』（中華書局、1960 年）、『初学記』（中華書局、1962 年）、『芸文類聚』（中華書局、1965 年）、『後漢書』（中華書局、1965 年）、『文苑英華』（中華書局、1966 年）、逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、1983 年）、『文選』（上海古籍出版社、1986 年）、『全唐文』（上海古籍出版社、1990 年）、『日蔵古抄李嶠詠物詩注』（上海古籍出版社、1998 年）、『天徳闘詩』『江吏部集』『泥之草再新』『本朝無題詩』『続浦嶋子伝記』は塙保己一編『群書類従・第九輯』（続群書類従完成会、1960 年）、『和漢兼作集』『新撰朗詠集』は『新篇国歌大観』によるものである。

※本稿は中央高校基本科研業務費専項資金（「中国循吏故事在日本古代的本土化研究」）の助成を受けたものです。